

北の鉄道風景

Train number; 11D

2021.6.13 13:57

1/640, f/7.1, ISO 200, f=24mm, Daylight/Sunny

5504×8256 Raw

第124回

帰らざる夏

五十度近い熱気の中で、一ト以上の石炭を焚^くべる肉体労働を強いられた。その上、信号を確認し、徐行区間を喚^{かん}呼^こして機関士に伝え、軽業師^{かるわざし}のように通票を受け渡す。水面計には常に視線を飛ばさなければ空焚き事故、火床^{ひど}を最高の状態に保たなければ列車遅延だ。半袖厳禁。長袖のナツパ服、軍手着用。あつさり火傷する機械たちが仕事相手である。

蒸気機関車^マというこの機械、鉄の馬とはよく言ったものだ。なだめながら

でないと走らない。走らせるのは機関士だが機嫌を取るのは機関助士だ。カマの性格もそれぞれで、腰が重いやつはやたら黒煙を吐くし、じゃじゃ馬はすぐ空転する。どっちもどっち、いずれにせよ始末は機関助士がつける。

防雪林の緑を背に遠方信号機が橙色の腕を下ろしている。一息つきたいが、背中に塩をふかせてレギュレーターをフルにしたままの機関士の姿に、まだ



重労働の際を見てやっと席につく機関助士。決して涼しいとは言えない風でもホッとする一瞬。だが、次の作業はそこまで来ている。室蘭本線 1975



写真と文＝眞船直樹

まだと言いつ聞かせる。やがて見えてきた場内信号機の赤いお辞儀姿に「本線場内進行」を喚呼しながら、底を打ってきた水面計を目の端が捉えて、反射的にインジエクターに手が伸びる。タイミングを合わせてハンドルを叩くように回すと足元がキューツと鳴いてボイラが水を吸いはじめる。その音が、森にこだますれば、一丁上がりだ。列車は給水ポンプを心臓の拍動のように打ちながらホームに滑り込み、腹の底から絞り出したブレーキの軋みとともに峠の駅に足を止める。

轟音は消え、発電機のタービンの唸りだけになる。駆け寄ってくる助役の足音さえよく聞こえる。「ご苦労さまです！ 定時！」の声に機関士は当然といった顔で言葉を返す。そして通票を渡した途端、夏の気配が舞い降りる。蝉の声、つばめのお喋り、風の囁き、入道雲、照りつける太陽。夏とはそんなふうに見えるものだった。空調の効いた部屋など言わずもがな、マイカーで遠出したところで、こんな夏はやってこない。辛さのトンネルの向こうで待ち構えていたあの頃の夏はもう来ないのかも知れない。